



会報

会報 第8号

平成28年4月発行

内藤恒雄駿河半紙技術研究会会長が語る

独立四十周年を迎え、今後を考える

今年五月に独立四十周年、また手漉き和紙業に従事して四十六年目を迎えます。一言で表すと、よく続けてくることができたと思います。

独立してからは、生業で行っている訳なので、「お買い上げ」頂いていなければ、現在はありませんでした。諦めない性格と、継続することで信用を得るといふ一念が、良いお客様に恵まれたと思います。この仕事を通しての一番のメリットは「色々な方々との出会い」です。平成六年に、今でも使われる言葉「行幸啓」のお話しを静岡県より頂きました。皇后陛下は、手漉き和紙に造詣が深いという事は存知上げていたのですが、天皇陛下にもお買い上げ頂いた事は、大変名誉に思います。そして皇后陛下がお買い上げ頂いた手漉き和紙をお気に召し、平成七年の特別注文にも発展しました。

美術全般に関心があった事も幸いし、手漉き和紙をお使い頂く書家・美術家を選び、訪問し「お使い頂いての良し悪し」を教えて頂いたことは「キンス」には代えがたいものです。直接お使い頂く美術家からのご意見は、制作活動に自信を深めました。

平成二十六年「和紙・日本の手漉き和紙技術」ユネスコ無形文化遺産登録を期に、手漉き和紙は「産業から文化」へと考えております。手漉き和紙は、

千三百有余年の歴史を有し「日本独自で世界に誇れる手仕事」と考え、今後とも手漉き和紙の「スバラシサ」をご説明しつつ、その時代の文化として継承されていくものと確信しています。

第五回 和紙文化講演会

増田 勝彦の軌跡 その一

手漉き和紙がユネスコ無形文化遺産に登録されたお話を皮きりに、増田先生がこれまで手掛けてきた文化財、特に掛け軸や屏風、経典など紙や布製の文化財の修復についてのお話を伺った。文化財の修復と一口に言っても、紙や布に生えてしまったカビを落とす作業やひび割れを埋めていく作業など、聞いているだけでも、その作業に要した時間と作業に携わった人の労力が想像されて、気が遠くなる思いであった。例えば、絹本に発生したしみはカビの一種であるが漂白剤は使えないので、しみを軽減させるために蒸留水で地道に洗う。また、土石流の被害にあった一カ月後に泥に泥に掘り出された経典の修復を手掛けたこと



ともあったが、初めてのことであったので修復方法を検討しているうちにカビが大発生してしまっただ。とりあえず巨大な冷凍庫を借用して冷凍保存をし、めどが立ったところで修復に取掛ったという。さらに修復する

のに必要だと思われる紙などの素材があるとその修復工房で紙すきや絹織まで行って必要な素材を作る。ちなみに修復素材にまでこだわるのは日本だけでヨーロッパではここまでのこだわりはないそうである。日本ほどの最先端の技術力を持った工業国で手漉き和紙や漆、手織りの絹織物、陶芸、鉄瓶などの手作業（クラフト）が生き残っている国は他にないということも増田先生はおっしゃっていた。日本にいとそれが当たり前であるかのように思っていたが、よく考えると不思議なことなのかもしれない。

何百年と受け継がれてきた文化財の修復という地道な作業が日本のどこかで今日もコツコツと行われており、文化財の保護や文化の継承が、それに関わる多くの方々の努力によって維持されていることを思うと頭が下がる。同時に、現在まで保護されてきた様々な文化財を目にできることのあるがたさも感じる。

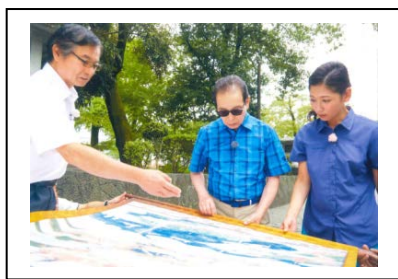
ところで、ユネスコの無形文化遺産に登録されたということは、それがなくなってしまうかもしれない危機にあるそうである。今回、手漉き和紙が登録されたということは、年々手漉き和紙に携わる方が減っていく技術の継承が危ぶまれているということであろう。受講者の中から、手漉き和紙を保護していくために私たちに何かできることはあるかという質問があった。増田先生は「和紙を買って使うことです。」と即答された。まったくその通りだと思う。日本という国で生まれてこれまで継承されてきた文化を一つでも多く後世に残すためにも、少し贅沢をして、身の回りに気に入った本物の工芸品を置き、そして使うような生活を考えてみようと思う。

(文責 四條里美)

駿河半紙技術研究会理事 渡井一信氏

「ブラタモリ」(NHK総合テレビ) に出演

二〇一五年十月十日・二十四日・三十一日に、前・中・後編の三回にわたり、NHK総合テレビで放映された「ブラタモリ」―富士山編―の案内人役として出演させていただいた。



一話目は、富士登山の玄関口である富士山本宮浅間大社、二話目は宝永火口周辺、三話目は富士山頂においてロケが敢行された。

この番組への出演依頼がきたのは八月のはじめであったが、最初に関わることになったのは、六月中旬にさかのぼる。富士山が世界文化遺産に登録された直後に全国放映されたNHKスペシャル『世界遺産 富士山

産 富士山



となったのが縁で出演することになったのである。

番組は、高低差マニアを自称するタモリさんが、まだ一度も登ったことのない高低差日本一の富士山に挑戦するというのが企画の根底であった。撮影は八月二十三〜二十六日であったが、準備段階において企画、構想策定にも意見を求められた。

さらに、市内や富士山を案内したり、放映までのひと月半は、編集期間で確認のメールや電話が夜昼関係な



水めぐる

『神祕』の企画制作を手掛けたNHK制作局のディレクターが、四月から東京勤務となり「ブラタモリ」担当

くもたらされた。結果、この番組にひと夏を捧げることとなったしまったが、放映された内容を見た時、この番組作りの素晴らしさに気付くとともに、この場に招かれたことへの感謝の気持ち湧いてくるのであった。

会員紹介【その四】

小松尚

秋田県出身。神奈川県在住。造園業。

製版・デザイン制作会社を早期退社後、街の植木屋さんとなり十余年。

年毎に成長する木々は遅しいが、地球環境の変化には敵わないようだ。

晴耕雨読の日々だが、ウドク時の過ごし方には自信あり。

ワールド MUSIC ・ ブラック

MUSIC etc. 聴き方も多種多様あり、最近の豊富な MUSIC 環境も面白い。また、長年のマイコレクションの整理、分類把握も限りなく余念がない程。

近年は沖縄民謡にも傾倒し、沖縄三線もおつなものだ。



原木せつ子

神奈川県横浜市在住。デザイン系大学教員を経て個人デザイン事務所主宰。

グラフィックデザインの媒体としての「紙」から、その素材の美と拡がりに興味を抱く。

袖野手漉き和紙には、ファイバーアート作品の素材を求め、元素材として関わりを持つ事となる。また、当時のファイバーワークの教材としても活用させて頂いた。稀有な袖野和紙は原素材とともに、その活用は、画用紙・製本素材・織物などあり、興味は尽きない。

現在、多岐にわたる制作素材を見直し、作品への再構築をしている。あるがままの自然に對峙し、自身の原風景の中の素材をも含め、ゆるりと對話する昨今である。夕べに、富士錦の杯を傾け。里の水田に映える富士を思い浮かべて・・・。

編集後記

内藤会長、独立四十周年おめでとうございます。「地道にコツコツ」仕事に向き合われてきたことに、敬意を表します。さらに、駿河半紙技術研究会を設立し、和紙技術伝承のためにも奔走されてきました。これらが報われるように、私たちも協力を惜しまないつもりです。(記・尾崎)